

田
山
花
袋

幼
き
も
の



幼きもの

一

道子は山の手の細い通りの小さな家で生れた。それは三間位しかないというような家で、奥の暗い三畳の産褥には、若い母親が乱れた^{ひさしがみ}庇髪を枕に当てて、静かに心地よげに寝ていた。

父親もまだ若かった。袴など穿いて、辛うじてさがし当てた新聞社へと出かけて行った。夜遅く帰って来ることもあった。「美佐さん、美佐さん」こう常にやさしい

声を懸けるのが近所にも聞えた。

道子は髪の毛の濃い大きな子であった。張った吸いつけな
い乳房をもどかしかつて、よく声を立てては泣いた。「ど
うしたのよ、ほら、ここがお乳じやないか」若い母親は
いつもじれったそうにして言った。

海岸のさびしい一間——そこで生れなければならぬ
運命を道子は持っていた。道子が腹にある間、母親は遠
い海の音を聞いたり、夕日に輝く波の閃きを見たり、松
の生えた磯田道をさびしそうに歩いたりした。母親は人
に見られるのを憚かるような体^{てい}であった。道子が腹に出

来てから、母親は始めて世間と相對したような気がした。不安、苦勞、羞恥——そこにはもう今までのような恋の歡樂はなかつた。

それはさびしい一間であつた。そこで彼女は始めて自分の通つて来た生活を振返つた。何一つ不足のない田舎の財産家の娘としての生活、無邪氣な楽しい何の苦勞もない学校での生活、それから東京に出て来てからの生活、それが忽ちにして嵐のような烈しい辛い波立つた巴渦うずの中に捲込まれて、自分で自分が自由にならないような境を通つて来た。絵葉書に書いた百合の花が見えたり、父

母のやさしい顔が見えたり、師と頼んだ人の巖かな顔が
こんがらがったさまざまな幻影の中を通って行ったりし
た。道子を懐妊してからの彼女は、男の言うままになる
より他に仕方がなかった。彼女は止むを得ず男に伴れら
れて身を匿した。父母から、世話になった師匠から、今
までの生活から、むしろ彼女の周囲の総てから……。

その一間からは貝殻の日に輝く家根やねだの、網を繕って
いる漁師の顔だの、汚い黒い溝などが見えた。松原の中
には月見草が咲いていて、そこの道を伝って行くと、葦

の疎らに生えた濁った川に土橋などが架っていた。男は三里ほど隔った田舎の停車場で下りて、そこから車で遣って来た。彼女がそこに身を隠してから四度位は来た。来るといふ報知のあつた時には、彼女はきつと半里位は迎えに出て来た。車にかけた赤い毛布が松原の中の路の遠くから見えた。

彼女は人目に立つ腹を抱えて、にっこりといつも笑つて男を迎えた。

遠い遠い海の音が絶えず聞えた。

それは堪え難い哀愁を常に彼女の胸に齎もたらして来た。

ドウ、ドウ、ドウ——夜が更けると、殊にそれが分明はつきりと聞えた。彼女はもう寒くなり始めた夜を蒲団の上に坐つて、その遠い、単調な、しかし悠遠な音に耳を傾けながら、腹の子の気味わるく動くのをじっと見ていた。

涙が留度とめどもなくその蒼いヒステリックな顔を伝って落ちた。

天気の変動で海の音は低く聞えたり高く聞えたりした。

「今日は波の音が高いわね」こう彼女は家の上さんに言う日もあった。

「あの音を聞くと、私悲しくなるわ」

こう男に言ったこともある。

「いっそ、海に行つて死のうかしら。

おなか

腹の児は可哀想

だけど……どうせこんなにして生れるくらいなら生れない方が幸福よ」彼女は蒼い顔をして、その遠い波の音に引寄せられるように言った。

その遠い遠い海の音から別れて、彼女は東京に来るところが出来るようになった。此方から捨てた師匠は、まだ彼女を捨ててはいなかった。「もう、汽車に乗つては陰呑かねえ。成るべく東京で生ませる方が好いがね。田舎

ではもしものことがあった時困る。医師もなし、十分な手当も出来ない」こう師匠は中に入った人に言った。師匠は田舎の父母の中に入ってまでも、そうした不自然な生活からかの女を救い上げようとしていた。彼女は都会の通りに注連飾しめかざりの松や竹が立って、青竹の籠に鴨や雁が並べられてあるような忙しい時に、そこから山の手に来て、男と一緒に新しい生活を始めることとなった。

そこで道子は生れた。

道子という名は、父親の親雄という名と母親の美佐子という名との頭字の仮名を取ってつけたのであった。恋

の記念、熱い心と熱い心との間に出来た親達の記念、その時来ていた若い友達は、

「道子、道子、それは好い、好い名だ——」などと言った。

「こういう記念物がすぐ出来るから厄介だ」

ある友達はこんなことを言った。

「貴様はじき夢中になるから、こういうことになるんだ。そこへ行くと、僕など上手だからな、そんなけちな罫になど入らんサ」などという友達もあった。

幼い児は若い母親にはいかにも重荷のように見えた。

泣く時にはどうして好いか解らない。何か着物に針でも残っているのではないかなどと心配した。「この子は親に似たと見えて、感情家だわねえ」こうも言った。産褥から母が離れる頃には道子はもうかなり大きくなっていた。何か物が見えるというように、眼をぱっちり明いて、瞬きもしないで一ところを見ている。師匠の細君は度々訪ねて来て、「この児は母さん似ね。眼などそっくりね」こう言っばぱっちり明いた眼のところを指などを遣つて見た。

近所のものに限らず、ここに遣つて来る人達は、若い

者同士の生活のいかに単純で無造作であるかを見ないものはなかった。箆タンスもなければ長火鉢もない。竈かまもなければ鉄瓶もない。土鍋で飯を焚いて、土瓶で湯を沸かしている。飯のない時には、角のパン屋で食パンを買って来て、小さな茶湯台ちやぶだいの上に新聞紙を敷いて、それでボソボソやって、朝飯や午飯などをすましてしまいかと思うと、こういう生活には見ることも出来ないような綺麗な派手な着物を着て、金の指環などはめて、若い母親は出かけて行った。

「新式の手鍋党だね」

誰かがこんなことを言って笑った。

どうかすると、道子は泣いたままそこに投げ出されて
いることなどもあった。「たんとお泣き」こう言って若
い母親はわざと知らぬ顔をしていた。「もう知らな
い！ どうでも勝手におし！ お前のためには母さんが
どんなに苦勞したか知れやしない。たんとお泣き！」道
子は手と足を高く揚げてひいひい泣いた。

かと思うと、堪らなくなつたように、放って置いた道
子を抱き上げて、抱きしめて、「誰れが——お前の母さ
んがかえ？ 馬鹿な母さん、こんな可哀想な眼に逢わせ

るような母さん、本当に馬鹿な母さんだねえ」若い母親の眼からは、熱い熱い涙が滴れていた。

過ぎ去った歓楽は再び来なかった。心と心とがぴったりに触れて、互いに顔を見合せて手を握った時のような心持はもう来なかった。夜は若い父親との間に道子が寝ていた。

「こんな境遇に誰が私をしたんです？」

とにかくそうした愚痴が若い母親の口から出た。

田舎の親達からは勘当かんどうされ、一生の事業と想った芸術からは離れ、学問上の努力からも見離され、こうした貧

しい苦しい辛い生活を送るようになってしたのは誰のためか？ 良家のお嬢さんという位置をも失い、これまで遣ったこともない水仕事なども覚えなければならぬようになつたのは誰のためか？ ——それを彼女は決して愚痴っぽく言うのではなかつた。また決してそれを男にばかり責める訳でもなかつた。けれど、少しは察して貰わなければ彼女の立つ瀬もなかつた。常にそういう腹が若い母親にあるので、何ぞと謂つては、男の腑_ふ甲_が斐_いないのが問題の種となつた。

「貴方に真面目に努力して頂かなければ、私はどうする

んです？」

こんなことも言った。

「貴方は私の分も一緒に働いて下さい。そうでなければ、私はこうしていられないんです。それが解らない貴方でもありますまい」

平生感情の強いヒステリックな女だけに、何ぞと云つてはすぐ激した。若い父親の身にしては、それが無理だとは思わない。貧しい生活も気の毒だ。自分のために犠牲になった女の一生も思わないではない。努力して出来ることなら、どんな努力でもして、一躍して立派な社会

上の位置をも占めたい。自分の周囲の人々——女の父母、女の師匠の高慢な顔、そういう人々を見返してやりたい。イヤ、いつかは必ず見返してやる。けれども、一日忙しい辛い埃だらけの新聞社の二階で、月二、三十円の月給で齷齪あくせくして、帰って来て、また女の愚痴を聞かされては、男の身にしても立つ瀬がなかった。つい激した声も出た。道子の生れたのを境にして、若い父親と若い母親とは、楽しい恋の歓楽の夢から次第に人間の辛い現実へと向って行つた。

近所では時々二人の物争いの声を聞いて吃驚びつくりした。

「あんな夫婦でも喧嘩することがあるのかねえ」

こう言って笑った。

ある時、二人のロマンチックな物語を知っている人が通ると、若い母親の声で、

「私の子ですから、私の勝手にします。生かそうと殺そうと私の勝手です」

というのが聞えた。道子のけたたましく泣く声もした。続いて甲高い尖った鳴き声が四辺に際立って聞こえた。

若い母親は滅多に道子を負って外に出るようなことは

なかつた。綺麗な着物を着せて、ハイカラな頭巾を冠せて、両手で抱いて通りを歩いた。

「よく重くありませんね」

人達はそれを見て言った。

二人は伴れ立って師匠の家に出かけて行くことなどもあつた。その家は郊外にあつた。高い所の電車の停留場からそこまで七八町はあつた。その時でも矢張道子は抱いて伴れて来た。擦れ違ふ人々は、若い綺麗な母親に並んで、年齢のいくらかも違わない若い父親が、可愛い女の

児を抱いて歩いて行くのを振返って見て行つた。

ある日、電車の中で逢つた菫色の袴を穿いた二十一、二の娘は、「まあ好いお子さんね……何と仰しやるの？ 道子さん。好い名ね」こう言つて頬を指で触つて見たりした。若い母親は顔を赤くしていた。

二

道子は段々笑うようになった。母親の顔を見覚えて高笑いをした。その頃は家はその山手から電車に近い所に引越して居た。坂の下のようなところで、近所には銀行

に通う若いハイカラな人だの、大店に通う番頭さんなどが住んでいた。坂の中ほどにあるあふちの樹の繁った影が、道子の母親に抱かれている室へやからも見えた。

襦おしめ袢だの、よだれ懸けだの、小さい襦袢だのが縁側に山のように積まれてあった。それを洗うのも若い母親に一方ならぬ努力であった。それに井戸も深かった。隣の細君は見兼ねて井戸繩をたぐってくれたりした。手の荒れるのを気にして、勝手元の棚のリスリンを彼女は幾度となくつけた。

毎日一度ずつ道子は午睡ひるねをした。ソツト乳房を離して

立って来てから、一、二時間ほど、彼女に取って貴い自由な時はなかった。その間に裁縫もすれば手紙も書いた。時には努力というようなことを考えて、久しく向ったことのない十行二十字詰の原稿紙を出して、小品を書き出して見たりした。道子が目を覚まして泣き出す時は、かの女も泣きたかった。

「もう眼を覚めたのかねえ」こう言っただけで彼女は道子を抱いた。

若い友達は矢張そこにも遣って来た。ロシアの若い人達の話をするような夥伴かはんで、一面満し難い生存欲から起

る不平不満を持っているような群であつた。学校から始めて社会に出た人達には、物が総て新らしく鮮かに見え
た。かれ等はよく激した。どうせ社会の醜悪おりに触れなければならぬものなら、その底の滓おりまでも嘗めようとした。かれ等は酒を飲んで烈しい議論をした。

道子はそういう若い人達の手によく抱かれた。「子供
って言うものは無邪気なようなもので、実は何でもない
んだ。笑つたり何かするのは動物本来の一種の保護色だ
ね」などと言う人もあれば、「子供なんて一塊肉のよう
な気味のわるいものだ」と言つて顔を背けてしまふよう

な人もあった。子供どころか、恋をしないのを誇りとして
いる青年もあった。妻子を犬猫のように捨てて顧みない
人などもあった。

「どうももう少し大きくなければ、玩弄具にもならない」ある髯の生えた青年はこう言って抱いて見た道子を母親に帰した。

道子はこうした父母と周囲との中で、よく声を立てて泣いた。どっちかと言えば、弱々しい方で、声もそう大して高い方ではないが、時にはそれが引切れそうにして泣いた。

「泣くのは幼児の運動のためだそうだ。泣くだけ泣かせて置くとは黙ってしまふから不思議だ」こう若い父親は言った。

母親も時には自分の体が堪らないというように道子をそこに投って置いた。雑誌や新聞に書いてある育児法や哺乳法などは何の役にも立たなかつた。片時も乳房から離れまいとする羈絆きはんが殊に母親には辛かつた。

母親は自分の遣つて来た過去をおりおり振返つて見るような心持になつていた。一年間！ その甘い蜜のような夜の歡樂とこうした今の灰色の佗しい苦痛との間に

は、僅かに一年に足りない月日が経ったばかりであるが、その短かい間に、どうしてこういう気分になったか、どうしてこういう生活の状態になって行ったか。甘い甘い、女の肉体も溶けて行ってしまいそうな男の言葉、熱い熱い、女の心も全くそれに抱かれてしまいそうな男の胸、それを女は繰返して考えない訳には行かなかつた。氷のように溶けて行った男の情、それは実際虚偽であつたらうか。

一年間！ その間には随分種々のことがあつた。懐妊と知れて、それを彼に打明けようか打明けまいかとして

の苦悶、この羞かしい醜い形を世間に見せまいとして、一度は自分一人でひそかに死に赴こうと思ひ惑った苦悶、その頃、男は打って変った女のさまに絶望して、蒼い顔をして、女の衣の裾にすがって泣いてその心を復活させようと悶えていた。彼女は少くともそのことに就いて半月は惑っていたことを思い出した。男にそれと打明けて話そうと決心したのは、忘れもしない、緑の影のチラチラした、ある公団のベンチの上で、その時決心を促したのは、男のなさけというよりも寧ろ腹の中の子に対する一種意識しない愛情であつたということが今で解つ

た。その時から二人の状態は変って行つたのであつた。

三

道子がえんこをするようになる頃には、道子の父親はよく家を明けた。赤い顔をして酔つて帰ることもあつた。母親の癩高い声が夜遅く近所の人達を驚かした。

こんな生活なら——この無意味な光明のない生活なら、師匠の許にいた頃の以前の芸術的生活の方が好い。「そんなら私は先生の許に行きますから」こんなことを若い母親は常に言った。「この子はどうにでもします。」

貴郎が無責任で投って置くなら、私は先生に相談してどうにでもしますから、本当に確乎とした考えを聞かせて下さい」こう手詰の談判らしい物の言い方もした。

道子の父親の方には、女の言葉に対する有利な有力なものは少しもなかった。自分の家らしい家もなかった。親らしい親もなかった。そうかと言って名誉もなければ、財産もない。男の犠牲に女がなっているとは誰も皆な言った。それに、「先生、先生」と言われるのが辛かった。師匠は師弟以上に美佐子を愛していた。美佐子が道子の父親と恋に落ちなかつたならば、師匠は世間の道徳など

は顧みずに妻子のあるのをも問わずに美佐子と烈しく恋したかも知れないような関係になっていた。今度の事件などでも美佐子の成功が知りたばかりに、師匠は美佐子の父母との仲に立って、美佐子を養女の籍にまで入れて、円満な解決を見ようとしたのであった。従って道子の父親の師匠に対する感情は、単なる感謝でもなければ、単なる競争でもなかった。それは複雑した如何ともすることの出来ないようなものであった。彼と師匠とは打解けて話し合っても、心から打解けることの出来ないようなところがあつた。それを若い母親は何ぞと謂うと持出

して、「先生に聞いて御覧なさい」とか、「先生に行つて話して来る」とか、いつも口癖のようにして言った。時には、「芸術家つて、そんな無責任な、妻子を飢えさせて、自分ばかり酔つて歩くようなそんな不真面目な真似をして好いんですか。先生に行つて聞いて御覧なさい」などと言つた。で、道子の父親はそうした間に起る空気に悶えながら、ますます鬱を酒に遣るようになった。愛した女の機嫌を取るような気分ばかりではいられなかつた。衝突は常に起つた。

その頃では、机の上の原稿紙は積まれたままになつて

いた。

若い母親も蒼い顔をしていた。イライラして暮すような日が続いた。神経の昂奮は釣り上った眼にも見えていた。癩の高い若い女の声は子の泣声に交って聞えた。

「美佐子さんは感情家だから困るんですよ。好いとなれば無闇に好くなるし、悪いとなれば無闇に悪くなるから困るんですよ。今日など聞いていると丸で気が変になつたかと思う位でしたよ。いくら私が止めても、喰つてかかつて行くんですからねえ。あれじゃ親雄さんだつてたまらない」師匠の細君は、夏の頃、そこに訪ねて行って、

帰って来てからこう夫に話した。

「女だって、ああいう生活状態では立つ瀬がないんだろう」その時は師匠は美佐子に同情したような口の利き方をした。

そういう生活の中でも、道子は日増しに可愛ゆくなつて行つた。壊れた犬張子の置いてあるのをじっと見詰めたり何かしていた。「可哀想で仕方がない——あの子を見ると」こう師匠の細君は言った。

月日は経って行つた。

田舎の母親が上京した。美佐子は道子の父親に隠れて

こっそり逢いに行ったりした。田舎の豪家で何不足なく育った娘は、乱れた髪をして、指環もない指をして、肥った血色の好い母親と相對して泣いた。

この母親の出京が道子の母親と父親との間を一層悪くしたのは止むを得ないことであつた。それに、暫くしてから、父親の勤めている新聞社に幹部の動揺があつて、退社しなければならぬような羽目になつたということも、この家庭をして終結に近づかしめる一原因であつたに相違なかつた。酒、質屋、生活難、悪友、無責任、——こうした言葉が、若い母親から師匠に遣つた手紙の

中に沢山書いてあった。

押詰った年の暮のある晩、道子は母に負われて家を出た。その時戸外には風が寒く吹いていた。磨いたような月が林の上に明るく出ていた。ねんねこに負われた道子の影は黒く地上に映っていた。

それから道子は今までとは違った人達に抱かれたりあやされたりした。それは明るい電燈の点いた室へやで、そこには頬髪の濃い四十恰好の人だの、束髪にした三十位の細君だの、若い銀杏返しに結った女などがいた。子供の多い家だった。その子供達は道子のえんこをして驚いた

ような大きな眼を睜っているのを珍らしそうに見た。

「ヤア、笑ってるア」などと言った。道子はえん、えん、えんなどと言って、躍上って高笑をした。

道子の父親は家庭を破壊しようとは思わなかった。師匠と美佐子と美佐子の田舎の父！との関係から、どうしても破壊しなければならぬような具合になって行った。かれは妻子を捨てて、儂い一場の夢であった恋を捨てて、自由な生活へと向って行った。

若い銀杏返に結った女は、よく道子を抱いたりしてく

れた。若い母親とその女とは、間もなく離れることの出
来ないような親しい間柄になった。「一緒に勉強しまし
ようね、ね」などと感激したように若い母親は言った。
もう一度、師匠の監督の下に昔の芸術の生活に入ろうと
して彼女はいた。

師匠は飛んで行った小鳥が帰って来たような喜びを以
て彼女を迎えた。新しい生活、そこに彼女を導いて行こ
うとした。真の芸術の生活に入るには、一度そうした現
実から出て来たものの方が好いなどとも思った。

銀杏返に結った女と美佐子とは師匠の家が狭いので、

別に一軒家を借りることにした。年の暮の二、三日前に、その人達はそこへ引越して行った。落葉の音がしたり松の音が聞えたりするような家であった。

道子は若い人達の間に関元氣の好い日を送っていた。もうそろそろいざり這いが出来る頃であった。「みいちゃん、みいちゃん」と銀杏返しに結った女は道子を可愛がった。野から停車場に出る長い路を、二人はいつも都の方へと出て行った。若い母親の脊には道子が常に負われていた。

茶湯台の上に犬張子が置いてあった。それを長い間、

道子は取ろうとしていた。えん、えん、と声を挙げていつも這って行つた。ある日思いもかけず茶湯台につかまつて立とうとしているのを見た銀杏返しの女は、「まア、みいちゃんか——御覧なさいよ、もうじき立つわねえ」
こう若い母親に言つた。

若い母親は男に別れて、また子に別れなければならぬ。いよゝな運命と相對してゐた。一人で世に立とうとする彼女には、道子は如何ともすることの出来ない重荷であつた。それに子があつては勉強も出来なかつた。師匠は又師匠で二人の間のかすがい銚かすがいであつた子が再び二人を一緒に

する情緒となりはしないかという事を窃ひそかに恐れた。

若い母親に取っては、子に別れる悲哀もあるが、また一方では、自由な身軽などこへでも勝手に出て行かれるような処女時代の生活に返れることを望んでもいた。

やがて里子に遣られる運命になって行く道子を、人々は可哀想に思った。「何アに近い所に遣って置けばいつでも逢われますからね……心配はありませんよ」などと師匠の細君は慰めた。若い母親も後には自分から進んで里子の口を捜すやうになった。好い貫手があるなら遣っても好いなどと言った。

田舎へ行く汽車の中で、近く子を亡くした母親と一緒に乗合せて、あの人ならばと不意に遣る気になって、その住んでいる東京の場末の町をさがして、それが石油を鬻ぐ家であったので、もしや火事でも出すようなことがありはしまいかと思つて、急にやることを止したり、見も知らない髯の生えた請負師のような男に手軽く遣る約束をして、帰つてから師匠に叱られて泣いたりした。一度はもと身を躲していた海岸の家の上さんが世話をしやっても好いというので、わざわざそこまで行つて置いて来たが、どうしても泣いて泣いてなつかないので、そ

の翌日上さんはわざわざ伴れてかえしに来た。若い母親は銀杏返の女と一緒にそれを郊外の停車場まで迎えに行つた。

「私を見ると、ちゃんと覚えていて、にこにこ笑つてるんですよ」と道子に乳房を含ませながら、美佐子は人々にその話をして聞かせた。

母親のあたたかいふところから離されるのが幼い兎にも、わかるらしかった。それからは片時も母親の傍を離れまいとした。母親の姿が見えないとすぐ泣出した。若い銀杏返の女が手を出しても、決して以前のようになん

く抱かれようとはしなかった。いつも母親の方へ逃げて行つた。誰の脊にも負われなかった。周囲の人達は、若い同士の夢のような恋の中から、こうした悲しい母子の別の生れて来るのをさまざまの心を以て見た。

正月に師匠の家に音づれて来た多い客の中に、田舎にいる師匠の細君の兄さんがあつた。それは小作りなやさしい物の言い方をする人であつた。道子の母親は前からその人を知っていた。田舎の大きな寺の住職をしていた。女の児が一人きりでは淋しいから、くれるなら貰つて育

てても好いと言い出した。和尚さんが行つて見た時には、道子は日の当る室の中を彼方此方と這つて元気よく遊んでいた。和尚さんが手を出すと、不思議にも素直に抱かれて行つた。「まあ、この子はどうしたんでしよう、解るんだわねえ」若い母親は目を睜るようにして言った。どこか悲しいような調子も籠っていた。

銀杏返の女の故郷は雪の深い寒い山国であつた。何かにつけて美佐子がくよくよしているの、「一緒に私の故郷の方へ行つて見ませんか、東京にいて何か考えてい

るより山の温泉にでも行つて見る方が余程好いと思うわ。そして二月ほどいて、帰りにみいちゃんを田舎のお寺に置いて来て、それから新しい本当の芸術に入ろうじやありませんか」こうその女は美佐子に勧めた。

師匠もそれに賛成した。

美佐子は道子を負つて出かけた。寒い寒い雪の中の田舎町、凍豆腐と蒟蒻こんにやくの御馳走、かんかん雪の凍った町の道、家々の軒には氷柱が長く下つて、子供達は竹の輪の下駄を穿いて軒下で氷滑を遣っていた。それでも二人がその町にいる間は、晴れた好い日が続いて、四面の

山々は雪が眩いほど碧い空にかがやいていた。銀杏返の女の家には、朴訥な父母と肥ったやさしい姉さんがいた。故郷の火燵の周囲の暖かい団欒は、親を離れた美佐子の心を動かさない訳に行かなかった。彼女は三百里を隔てた遠い山の中の父母の夢を毎晩のように見た。

二三日してから、二人は山の温泉へ行つた。そこには溪流が濃い錆鉄色に寒そうに流れていた。大きい鉄の橋なども架っていた。県庁のある町から人々の遊びに来るような所で、山の中には見られないような一種の賑かさを持っていた。そこでは三味線の音も聞えれば、女の騒

ぐ声もした。二人は大きい旅館の三階の一間で日を送った。今日からは芸術の眞生活に入るのだなどと言つて、揃つて前髪を切つて支那の女のような髪の形にしたりなどした。可愛い子を一人つれたここ等には余り見馴れない二人を人々は不思議にした。噂の種にもした。

その三階の一間には晴れた春のような日影がさしたり、烈しい吹雪が凄じく吹きかけたりした。二人は寒くなるに日に何遍となく梯子を下りて、漲る湯壺の中に肌を浸した。全く世を忘れたようにして二人は暮した。

そこで道子は最初の誕生日を祝つた。その日は婢に頼

んで態々赤い御飯を炊いて貰った。白酒を買って来て飲んだりした。銀杏返の女は酔って道子に髯を生やして見たりして笑い興じた。それは雪の降頻る日であった。若い母親は、道子を抱いて、熱いキッスをして、「お前のお父さんは今日はどうしてるだろうねえ。どこかでお前さんの誕生日を祝って下さるだろうねえ」などと言った。

二人は一月以上もそこにいた。

帰りに寄った田舎の寺では、和尚さんも上さんも喜ん

で迎えた。一人ぼっちの寺の女の児も、嬉しそうにして道子を見た。

野には芹、よもぎ、なず菜などがもう萌え出していた。山から比べると、別な世界に来たように暖かであった。梅なども咲いていた。二人は寺の本堂の一間を借りて、そこで自炊をした。寺の人達に道子の昵なじむまで、こう言つて二人は一日一日と暮して行つた。塩が辛くつて口の曲るような鮭だの、サンマの干物だの、十銭も買うと食い切れないほどある田舎鮓などをよく食つた。朝など和尚さんが行つて見ると、朝日の当る本堂の板敷の一隅に、

七輪が置いてあって、そこに懸けた土鍋からは、白い湯気がぱつとあがって、味噌汁の臭いが四辺に充ち渡っていた。室の中では、若い母親が道子に粥を哺って食わせていた。

もう、物を食い習うようにと、塩煎餅なども買って来て置いた。

寺の上さんは道子を負ったり何かした。乳を離れさせるように、ようにと若い母親は骨を折った。乳を飲もうとすると、目を陰しくして叱って見せた。と、道子は母親の機嫌を取るようにしては乳に縋って来た。若い母親

は心の中で泣いた。

でも別れる二三日前には、寺の女の児と一緒にになって、日当の好い庫裡の玄関で、元気よく遊んでいるようになった。それは曇った佗しい今にも雨が降って来ようとするような日の午前であった。「それじゃどうぞお世話を——」言いかけて若い母親は急いで見付けられないようにして寺から出て来た。道子が上さんに負われて畑の方へ行った間に、母親は銀杏返の女と一緒に汽車に乗って別れて来た。

母親の眼は長い間赤かった。

四

これから淋しい芸術の生活に入ろうとする間際になつて、不思議にも美佐子の心は別れた男の方に向つて行つた。悔い改めた男は、美佐子が東京の郊外の家に戻ると間もなく、その所在をさがして遣つて来た。子から離れ、芸術に入る淋しさに堪えかねた女には、やさしい甘い男の言葉に昔の恋の復活を認めない訳には行かなかつた。一度男を知つた女の一人住いの淋しさも堪え難かつた。男はその時別れた間のさびしい苦悶を記した日記を女に

見せなどした。道子の誕生日の条に圈点が施してあって、その一日の淋しく悲しかったことが細かに哀れに書いてあった。それが深く美佐子を動かした。

男と美佐子と師匠と、この三つの心は再び生きて動いた。師匠の不賛成は美佐子と男との恋の復活に火をつけたような結果になって行つた。「そんなことをするならば、一切構わん。もう路傍の人だ」師匠は激した。

「自分の生んだ子が重荷だからツて、それを他人に育てさせて、また元の男と一緒にならうなんてよく言えたものだ」こんなことも言った。

美佐子は男の心に引かれて、ある日、銀杏返の女の留守の間に、戸締りをして、そして出て行った。

「そんなことはない、そんなことはない筈ですが」こう銀杏返の女は不思議にした。けれどそこには他人には解らないような深い複雑した心理が三人の間に働いていたのであった。

若い母親と道子との縁はこれで切れたも同じようになってしまった。「先生に頼んで道子を引取って」と云うことは、男と美佐子と一緒になる話の大きな条件になっていたが、そういうことは言い出すことも出来なくなっ

てしまった。師匠の方でもそんな風にして行った女にそういう好意は持てなかった。男が女の家へ行つてじかに女を奪つて行ったという形が師匠には不愉快であつた。敵——こうした考を互いに抱いた。

それから三月ほど二人は東京にいて職を求めた。しかしどこにも口はなかつた。やがて二人は相携えて田舎の新聞社へ行つたということを師匠は耳にした。男は始めて完全にその女を獲ることが出来たのである。

四

で、何も知らない道子は愈々頼りない位置に置かれた。師匠は美佐子の出踪以来、道子に対して一種憎悪の念を抱くようになった。美佐子の子としてではなく、その男の子として憎かった。そういう重荷を平気で置いて行って、再び恋の歓楽に身を任せた二人の憎いにつれて、矢張道子も憎かった。自己の不満に対する焦燥の念もいづらかそれを手伝った。

和尚さんは、「困ったもんだね」などと言った。けれど籍はもう和尚さんの方に入っていた。どうすることも

出来なかった。「まさか先から返せとも言えまいが、返せと言ったって、そういう風にして行っただけではおいそれと返しても遣られないね……若い者はそれだから困るねえ。そんな真似をしないで、それならそれで、円満に解決することがいくらかでも出来るのに」こう和尚さんは笑いながら言うた。勿論、やさしい和尚さんは、それがために、一度自分の子にした道子を可愛がらなくなるなどと言うことはなかった。けれどいくらか気分が違わない訳には行かなかった。

寺の上さんは、「一緒になったら返してしまおう方が好

いがね」とも言った。

道子はその頃はもうかなり寺の親達に懐いていた。泣いて泣いて絡夜寝られなかったのは二晩位で、その新しい境遇にもやがて道子は馴れて行った。やさしい人は解ると見えて、和尚さんにはいつも喜んで抱かれたり負われたりした。

道子はやがて若い母親の手元にいる時とは丸で見違えるような子になった。もう前のような綺麗な可愛い子ではなかった。鼻水を出したまま汚い顔をしたまま、汚れ

た手足をしたままであることが多かった。都会の子の育て方と田舎の子の育て方ではそこに夥しい違いがあった。

師匠に取っては、道子を見るのが不愉快でもあり辛くもあつた。そのために田舎の寺へ行くのを見合せたことも一度や二度ではなかつた。「ああああの子がいるんで、田舎へも行く気にならなくなった」こう細君に言うことなどもあつた。道子を見れば——見違えるような汚い田舎子になつて、それも知らずにここにこしている無邪気な道子を見れば、染々可哀想になつて、どうしてそ

んな考を起したかとは思うが、それと共に、憎い無責任な二人が、歴々といつも眼の前を掠めて通った。「無責任な奴だ！　子供をこういう境遇に放り出して行って」
こういうかれは、続いて無責任な行為を二人に行わせるに至った動機を考えて黙然とした。

「離れていると、見るのも厭だという気がするが、にこにこしている無邪気な顔を見ると憎むことは出来ないね」

こう師匠はある時和尚さんに言った。

道子は段々大きくなった。母親に別れる時、辛うじて

つかまり立ちが出来る位であつたが、この頃ではもうちよこちよこと二歩三歩足を運ぶことが出来るようになった。今歳九つになる寺の女の児はよく負つて外へ行つた。上さんにももう懐いていた。寺の児と近所の子供と庫裡の玄関のところ遊んでいる中に交つてちやんと坐つてゐる小さい姿は、いつも四辺にくつきりと際立つて見えた。「かア」「とア」などという言葉も覚えて来た。不思議にも本当の子のように我儘をいったり泣いたり喚めいたりしなかつた。物を貰うと「あん」と言つてお辞儀をした。

「本当にわかりの好い児だよ」と上さんは言った。

不愆ふびんという情が一層加わると見えて、和尚さんは「道や、道や」と可愛がって育てた。女の児が根性の悪いことなどをすることがあると、「お前は道の姉さんじゃないか。そんなことをするもんじやない」と言っては叱つた。時にはその事が和尚さんと上さんとの間に物言いが始まることさえあった。「道は母さんに似たと見えて、しつかりしてるよ、中々敵いやしない」こんなことを上さんは言った。

夜は一度ずつ眼を覚ました。それから和尚さんの床

の中に入らなければ承知しなかった。

夏が来たり秋が来たりした。銀杏の葉はやがて黄くなつて落ちた。裏の林が海のように鳴る冬も遣つて来た。

田舎へ行つた若い父母からは何の頼りもなかった。

「どうしても本当の子とは違うね」

ある時、和尚さんはこうしたことを東京から来た師匠に言った。道子の二誕生の頃であつた。

「自分はそんな気は少しもない。本当の子として育てて
いる積だが、どうも違うねえ。本当の子なら物など欲し

がっつても、折檻してまでも遣らないようにするんだけれど、どうもそういう気にまではなれない。寧ろその反対に物惜しみをするように人に思われるような気がして、つい多く遣ってしまおうようになるよ」

「それはそうだろう」

「肉体の関係というものが無いから、つまりそういうことになるんだねえ」

和尚さんは平生に似合わないようなことを言った。二人は貫子ということに就いて話した。

「どうも矢張本当の親が育てるべきものだ。つくづく僕

は貫子というものの不自由だということ悟った」こう和尚さんは繰返した。

道子は可愛い気のない子になっていた。濃かった髪の毛も薄く、顔も蒼かった。お腹と頭とばかり大きかった。

ちよこちよく遣って来て、そこに坐っていた。餛飩うどんなどを小さい椀に分けてやると、それを手で食った。悪戯などもよくした。言うことをきかないと、「養子ツ子に遣っちまうぞ」こう言うと、和尚さんの顔をじろじろ見ながら悪戯する手を留めた。

和尚さんが道子を抱いて、わざと、

「道は養子ツ子に行くんだな」

と言うと、すぐ頭を振って見せた。

「そうか、行かないのか、父さんは養子ツ子に行くとは
かり思っていた」

道子には養子にやられるということが何よりも辛い
らしかった。

師匠は道子を見る度にいろいろなことを頭に浮べた。

あの若かった美佐子の子と言うことが不思議にも思え
た。いつとなくあの女の青春の夢の過ぎて行ったことな
ども考えられた。道子の大きくなった後——かれと美佐

子と道子との間にいかにロマンチックな物語が編まれるであろうかなどとも想像した。道子が物心がついてからの自分に対しての考も想像された。

他人に貰われた子としては、道子は寧ろ仕合せの方である。しかし矢張不仕合せの運命のもとに生れた子であった。

夏は跣足はだしで土いじりなどをしていてもあった。上さんが畑で仕事をしていると、道子はその周囲で遊んでいた。鐘楼の傍に独りでぽつねんとして遊んでいることもあった。葬式が来ると、大勢の汚い子供に交って、撒

かれた銭を拾ってなどいた。

落葉はやがて寺の庭を埋めた。

冬がまた来た。

三度目の誕生が来た頃、めずらしく道子の父親から手紙が来た。田舎から大阪に出て新しい新聞事業に従事するということが出来た。新たに子が二人の間で生まれたという消息も知れた。

もう道子は枕を負ったり葬式の真似をしたりするようになった。口も大抵のことは利けるようになった。夜も一人で寝た。

庫裡の広い勝手元を、芋の子を箸にさして食いながら歩いてなどいた。

剖葦よしきりが裏の蘆荻の中で頻りに啼いていた。その日はその月に入ってからからの暑い日で、キラキラする日影の下で、笠を冠った男が五六人、熱心に畑の桑の枝を芟かっていた。道子は午前は元気よくそこへ行つて遊んでいた。別に変わったこともなかった。ところが日の暮れる時分、和尚さんは、道子が勝手に近い一間に疲れたようにして寝ているのを発見した。「どうかしたか？」触つて見た頭は火

のように熱かった。眼が釣上っていた。

「おい道が大変だ！」

こう和尚さんは思わず叫んだ。

上さんが飛んで来た。女の児が驚いて玄関の方から遣って来る。水を顔にかけたり、声を立てて呼んで見たりした。前の長屋にいる傭男は、急いで医師の許へと飛んで行った。道子は、和尚さんに抱かれて、気が付いて、眼を細く明いて、にっこり笑った。しかし安心して傭男の医師を呼んで来るのを待っていないような容態ではなかった。和尚さんは道子を上さんに渡して、今度は自

分がそそくさと出て行った。

どこの医師もぐずぐずしていて、漸く和尚さんが懇意の医師を連れて来た時には、もう全く日が暮れ果てていた。蚊が音を立てて寄って来る中で上さんは薄暗いランプを前にして、道子を抱いて心配そうな顔をして坐っていた。脈を取ったり眼を見たりした医師はやがて首を傾けた。困ったような表情が顔に上って来た。

「どうも脳らしいですな」

「手重いでしょうか」

和尚さんは心配した。

脳膜炎、どうもそうらしく思われた。誰か他にもう一人立会って貰いたい。こう医師は言い出した。やがてその医師も来た。矢張診断は同じであった。

氷を買って来て頭を冷したり何かした。俄に湧くように起って来た災害に対して人々は唯狼狽した。「母アちゃん」「父さん」という小さな声が四辺に際立って高く聞えた。裏の方の八畳の蚊帳の中には道子を抱いて心配そうに坐っている和尚さんの顔が蒼白く見えた。

スヤスヤと眠るかと思うと、道子は時々大きな眼を明いて周囲を見回した。「母アちゃん」「父さん」と呼ぶ

声が継続した。「父さんか、ほら、ここにいるがな」和尚さんはこう言って、「道、苦しいか、父さんが見えるか」

一人の医師は何彼と深切に世話して遅くまでいてくれた。長火鉢のある室で、その病気について種々な話を和尚さんにして聞かせたりなどした。「どうも脳膜炎と言ふ奴は小児には難病ですな。それは治るのもありますけれど、多くは跡が痴呆になります、すっかり治るものは滅多にありませんな……知らせるところがあるなら今のうちお知らせになる方がよう御座んすよ」などと言った。

苦痛と絶叫と烈しい熱とが続いた。その夜は誰も眠られなかった。闇を額縁にした蚊帳の中には、疲れた上さんの顔と、心配そうな和尚さんの顔と、氷袋を顔に当てた道子の大きな頭とが終夜ランプに照らされて見えた。大きな三毛猫がそこに丸くなっていた。

夜が微^{ほの}白く明ける頃には、道子はもう屍になっていた。やさしい和尚さんの眼からは涙が流れた。「縁がなかったな道！」こんなことを言っては泣いた。「不合せな児だからと思って、どうか丈夫に育てて仕合せにしてやりたいと思ったのに、駄目だった」などと言った。上さ

んも眼を赤くしていた。女の児は箆笥の角のところ立って泣いていた。

電報を受取って師匠がそこに行つたのは、その日の午頃であつた。師匠は挨拶をすするのも待遠しいようにして、すぐ道子の屍の置いてあるところに行つた。そこには小さな枕に黄櫨だの杉箸を逆に立てた茶碗だのが置いてあつた。線香の烟が薄く颺あがつて、夾竹桃の赤い花が手向けられてあつた。師匠は蔽ハンケチつてある白い帕巾を取つて、眼を閉じて半ば笑つたようにして死んでいる道子を見た。師匠の眼から涙が流れた。

「不仕合せな生涯だった」

師匠は座敷に戻りながら、感激したようにして言った。和尚さんは昨日からの病状を繰返すようにして師匠に話した。その声にはやさしい悲しい調子が籠っていた。道子の父母のところにも昨日電報で知らせて、今朝又打つてやったなどと言った。若い人達の何の考もない無邪気な恋の歓楽が、こうした悲劇を形づくって行くという話なども二人の口に上った。

「本当にそうだとも……自分の本当の子なら、悲哀があつてもこんな悲哀などはありはしない。ああした境遇に

出来た子だからと思つて、それで同情して育ててやったんだが……」和尚さんは又眼をこすつた。

師匠は黙つていた。美佐子と男と自分との関係、それが無邪気な何も知らない幼きものの上に及ぼして行つたことを考えて默然としていた。

それは幼い不仕合せな道子の短い生涯を染々と思わせるような夜であつた。小さな棺と線香の烟と赤い花とを前にして、町の上さんや、後家さんや、お婆さんなどが集つて来た。和尚さんと上さんとは、不意に襲われた恐

しい病氣の話を繰返し繰返し人々に話して聞かせた。

その一間はさびしい、しかし明るい光に照されていた。田舎の夏の夜は早くも更けて、あたりはしんとした。時々思い出したように蛙のなく声があった。涼しい夜風が絶えず入って来て、多い蚊も左程苦にはならなかった。

菓子が出たり茶が出たりした。十二時近くなつて、和尚さんの親友であつた人の後家さんだという、三十五六の意気な田舎では見られないような女が遣つて来た。肥つた上品な上さんも居た。

小さな鉦が前に置かれた。

それを叩く調子につれて人達はこういう時にここに
流行る御詠歌を唄い始めた。

身は此處に、

心は信濃の善光寺、

導き給へや彌陀如来——

聞いていると身も心もそれに引入れられてしまいそう
な柔かな悲しい調子が鉦の昔につれて繰返し繰返し唄わ
れた。後家さんの声には滑らかな艶な巧みな節があつた。

蠟燭の灯が絶えずチラチラと夜風に動いた。

鉦の音と柔かな唄の声とは夜もすがらその一間に聞えていた。

近所の寺から導師が緋の僧衣を着て遣って来た。和尚さんは紫の僧衣を纏って親族席のところに坐っていた。

小さな棺を前にして、幼きものを葬る儀式はやがて始まった。本堂には近所の人々や道子の一緒に遊んだ子の母親や寺の懇意にしている人達などが大勢集っていた。

棺の前に蠟燭の灯を配って、やがて導師の長い長い讃経が続いた。

外では子守や子供達が、賽銭箱のところから顔を出して此方を見ていた。

引導がすんで、これから焼香が始まろうとする頃、寺の上さんは賽銭箱の前に行つて、銭を撒いた。

子供等の騒ぐ声が一しきり喧しく聞えた。

歴代の寺僧の墓地の一隅にやがて人達はその小さい棺を運んで行つた。大きな杉の森の中に篠や雑草や小さな灌木などの茂っているようなところで、暗い淋しい道には、古い落葉がじくじくした地面の上に散らばっていた。

草叢の中には、沼の跡でもあったかと思われるような黒い汚い水が溜って光っていた。

丸い輪塔形の墓がそこにもここにもあった。穴を掘ったところは左の隅で、水が三尺位のところまで溜っていた。「どうも水があるんでかなわない」人足はこんなことを言って、棺を納めた後の土を丸くならした。

香爐、位牌、線香の烟——位牌には仙鶴禪尼としてあった。寺の籍におるからそうした戒名をつけたと和尚さんは師匠に話した。尼、幼ない尼、道子の短かい一生には相応わしい戒名である。

寺では世話になった人達に膳を出すというので、その支度に忙しかった。近所の人達が大勢手伝いに来て大根を切ったり、餛飩を打ったりしていた。勝手元には大きな鍋から湯気が白く立った。

十二畳の座敷には、導師を中心にして、寺の重立った世話人だの、町長だの、学校の教員などが並んでいた。

東京から来た師匠もその一隅に黙って坐っていた。豆腐汁に蒟蒻の刺身にがんもどきの煮付、そうしたもの載せた膳は、やがて人達の前に巡ばれた。一しきり可哀想な幼い子のことが繰返されたが、それが済むと、今度は

地面の話だの、町の人々の噂だの、作物の話などが出た。老いた導師は、盃を唇に当てながら、梅干をつける時の話を隣の髭の生えた男にしていた。

日本文学電子図書館

蒲団・幼きもの

著 者：田山花袋

作成者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和43年 6月30日 30版発行



日本文学電子図書館